

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271401558		
法人名	株式会社 日進開発		
事業所名	グループホーム「くにみの里Ⅱ」		
所在地	長崎県雲仙市国見町多比良戊1449-415		
自己評価作成日	令和元年9月 30日	評価結果市町村受理日	令和2年1月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php">http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	令和元年11月28日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自然環境が豊かな場所で、近隣には県立百花台公園やフラワー公園があり、季節に応じ外出支援を行っている。また働く職員も、笑顔とまごころもったサービス提供をモットーに。自分たちで働きやすい環境づくりをしています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

島原半島の北側に位置する眼下に有明海を眺める当ホームは開設16年を迎え、入居者や家族、職員の笑顔とまごころを大事にしながら温かなケアサービスの提供に取り組んでいる。昨年より管理者が交代し、新たな視点によって入居者の暮らしや職員の勤務形態を把握しながらより良い介護の実現に努めている。その中でも法人全体でネットワークを活用した「事業所管理簿」は離れた位置から他事業所の業務を把握することができ、現場力を高めることに加え職員の業務意欲の向上にも繋がっている。今年度は法人全体として離職率を下げることを重点に置いており、施設長は職員の声を聴くことを大事に関わるとともに、業務のみならず職員の小さな声も法人代表に伝えながら働きやすい職場づくりへと繋げている。入居者の住環境整備という建設業を母体とする法人の強みを活かしながら、ソフト面だけでなくハード面においても入居者にとって気持ちの良い暮らしを提供するホームに、今後ますます期待の持てる事業所と言える。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット名 C棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を職員1人ひとりが理解し、実行している。	職員は法人の理念に沿った関わりを意識し、職員それぞれが主体的に動く体制を作りながら入居者の暮らしや職員の業務の満足へと繋げている。施設長は職員一人ひとりによって理念の捉え方が異なることを理解しており、食事やミーティングの時間を活用しながら支援の方向性を確認し、理念の浸透を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の八斗木小学校の運動会への入居者の参加や、卒業生へのプレゼントを手作りし、直接手渡しに行く等交流が図れている。	一時期中断していた事業所の里祭りを昨年度より再開し、自治会長や民生委員、近隣住民が集い、入居者とともに笑顔溢れる楽しい時間を過ごすことができた。近隣小学校とは福祉体験の受け入れや入居者手づくりの作品を毎年卒業のお祝いとして届けるなど、心通う交流支援を行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元中学生や高校生の福祉体験や職場体験を受け入れ、生徒へ福祉への理解を求め、いい機会となっています。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居者も推進会議に参加し、実際の入居者の声を参加者に伝えるようにしています。入居者とご家族と一緒に会議に参加することで、沢山の意見や課題が明確にできるようになった。	運営推進会議では時季に応じた議題をもとに、出席者それぞれの立場からの意見を得ながらサービスを評価するとともに、運営の透明性を図っている。今年度は風水害発生時の対応を地域や家族と情報交換し、対応や方針の理解を促した。年度末の会議では年間活動内容の写真をスライドショーで参加者に示し、年度の反省を次年度に活かすよう努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	包括主催の小ケア会議に参加し、行政や民生委員との意見交換や事例検討会議を行い、地域の抱えている問題解決に向け話し合いをしている。	施設長は島原地域広域市町村圏組合介護保険課主催による集団指導や地域の介護事業所が集まる会議に出席し、現在の動向や方針を確認しながら行政と良好な協働関係を築くよう努めている。書類関係の問い合わせにも直接担当窓口足を運び、意識的に顔が見える関係づくりに取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、誰かに権利擁護推進委員の研修を受講してもらうなど、身体拘束や高齢者虐待についての理解と拘束の無いケアの実践。社内研修でも議題で身体拘束をとりあげている。	施設長はホーム代表者として法人が運営する身体拘束適正化委員会に出席し、法人内での取り組みや支援方法の把握に努めている。身体拘束委員を中心に現状に即した研修計画を立て、職員の身体拘束に対する意識を高めながら支援に取り入れている。研修資料については他の職員も閲覧できる環境を整備し、ホーム全体で身体拘束をしないケアの実践に努めている。	現在、入居者の言動の理由や支援方法については職員間での共通理解が図られているが、法人内研修への参加が一部の職員に留まっていることもあり、全職員への周知状況に課題が窺われる。身体拘束適正化委員会の議事録の再整備や職員の資料閲覧の押印、並びに再度拘束に関する具体的な行為の振り返りを行うなど、更なる取り組みが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見見過されることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月のミーティングでも身体拘束について取り上げ話し合っている。日頃より、身体拘束がない介護を意識して業務にあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	長寿社会課の研修を受講するなど、学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、ご家族が理解できるよう、一つ一つ解りやすいよう説明し同意を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者への面会時に挨拶だけで終わらず、近況報告を合わせて行い、そこで家族からの意見を聞きだし、サービスに反映している。	施設長や職員は入居者・家族との関わりを大切にしており、何事も相談や報告を密に行うことで家族とともに入居者の暮らしを支えることができるよう努めている。遠方の家族にはホーム便りを送付する際に担当職員から一言コメントを添え、前回の面会時からの変化をしっかりと伝えることで現状の理解へと繋げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個々の職員からの意見や提案は施設長が月に1回開催の施設長会議で協議してもらう。協議内容についても、会議開催後は議事録を回覧してもらうようにしている。	施設長は職員の「声」を集約し、月1回法人での合同会議で課題を伝えることで職場環境の改善に努めている。職員は業務の合間や申し送りの際に挙がる些細な意見や要望を大事な「声」として捉えており、互いに認め合いながら、自分たちで風通しの良い働きやすい職場づくりへと繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、職員の職場環境をその時にあった環境に整備している。給与水準も定期的に昇給するなど、給与形態も見直している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修を定期開催。テーマをあらかじめ決めて、各部署の持ち回りで開催しています。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	連絡協議会や小ケア会議に参加し、他の事業所の職員との意見交換や事例について協議するなど相互に介護サービスの質の向上に努める仕組みがある。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人にある程度の情報を聞きだし、詳しい情報はご家族に聞きだし、不穩の時には、聞きだした情報を活用し回想法を実践している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面会時には近況報告を合わせて行い、家族に安心していただけるように、またなかなか遠方で面会に来ることができない家族へは定期的に電話にて報告をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に家族やケアマネージャーからの情報を元に支援の方向性を決めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来る事の能力を継続して発揮できるよう支援を行う。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の状態が変化した場合、職員側の都合で支援の方法を変えるのではなく、家族にも状況を説明し一緒に支援の方法を決定する。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族以外でも、知人が面会に来て頂けるようにしている。また入居前から通っている美容室へも定期的に送迎し、関係が途切れないよう支援。	職員は入居者が家族と離れて暮らす寂しさや心情の理解に努め、時には本人と家族の仲介役を担いながらともに過ごす時間を大切にしよう努めている。家族との外出や外泊の際には介護の専門技術を伝え、移乗や排泄時の対応など家族の負担が大きい部分をフォローしながら安心して出掛けることができるよう取り組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員は入居者一人ひとりのできることを理解・把握しており、出来ないことがある時には、出来る入居者が手伝うなどお互いで協力して完結できるよう職員は声かけ・見守り支援をおこなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院にて契約が終了した際は、そこで関係性が終わるのではなく、次の受け入れ先と一緒に探すなど関係を継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意思を尊重し、出来る限り本人本位の介護サービス提供を目指している。	職員は入居者一人ひとりの生活リズムを大切にするとともに、その方の「できること」に目を向けながら生活の継続性を重視した関わりに努めている。これらの関わりによって、時間的な束縛を感じさせない家庭的な暮らしの提供へと繋がっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	極力、これまでの生活スタイルを持続する為に事前の情報を聞き、サービスに結び付けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人記録に日中の活動状況や夜間帯での状況を記録し、生活リズムやその時の状態等も記載している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に1回はミーティングを開催し、利用者のモニタリング・カンファレンスを実施。また入居者の状態変化の際、それに即したプランを作成。	職員は入居者の暮らしぶりを記録に残し、最近の状況を共通理解しながら現在の課題の把握に努めている。介護計画立案の折には家族の考えや職員それぞれの意見を集約し、本人や家族にも分かりやすい言葉で説明しながら本人が望む生活に繋げるよう取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	サービス内容に沿った個別の記録を記載。特記事項においては、気づきなども、申し送りノートを活用し、誰でも閲覧し知らなかったがないようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々入居者の状態に合わせた問題に対応。それぞれの問題点に着眼し問題解決に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居しても地域の一員として、外部の行事にも参加できるようにしている。地域の協力も得る事ができている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	くにみの里では入居前からの医療機関へ継続していけるよう変更なく受診している。そのことで本人、家族と安心感をもたれる。	入居者は入居前からのかかりつけ医を受診することができる。職員は入居者の小さな体調の変化にも注意を払いながら早期に対応するよう努めており、職員一人ひとりが高い意識を持って様子観察を行うことによって、医師や看護師への迅速な報告・相談へと繋がっている。この1、2年は大きな入退去もない。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1日訪問看護師に来ていただいている。状態を詳しく伝え、また特変時にはすぐに連絡し指示を仰ぐなど協力体制が確保できていることにより、介護職員は安心して業務ができる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には家族の負担軽減の為、施設職員が定期的に訪問し、状態を家族へ報告するシステムを構築。なかなか病院へ行けない家族からは助かりますとおっしゃる。病院側とも定期的に面談し、早期に退院に向け協議している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	施設では看取りまでできる旨を説明。だが医療行為が必要な状態であれば対応できない事もその際、解りやすく説明。	ホームでは入居者の体調の変化や治療方針の相談の折に医師や家族と話し合いながら、その方への対応方針の共有を図っている。今年度は敷地内のグループホームでの看取りに接し、本人や家族、また入居者への関わり方などについて考える機会となった。法人内でも外部の緩和ケア職員による研修の機会もあり、家族やチームケアを意識しながら今後も家族の希望に沿った対応に取り組む意向にある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内研修にて1回は救命救急の講座がある。1回受講したから良いではなく、何度も受講してもらおうようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	避難訓練には必ず1回もしたことがない職員を中心に実施。また消火訓練も消防署員の立会いの下実施。	ホームでは定期的な避難訓練を実施し、新規採用職員を中心に誰もが体得できる訓練体制を整備している。今年度は災害を想定した炊き出し訓練を行い、備蓄の水とご飯を入居者に試食していただいた。建設業を母体とする法人の強みを生かし、今後は太陽光の機材を整備することで風水害による停電に対応できるよう、整備を検討している。	現在、訓練日に出勤している職員を中心に訓練全体の行動について振り返りを行っているが、訓練に参加できなかった職員に向けたユニット独自の振り返りや入居者の特性を考慮した上での記録物が確認できなかった。現状の訓練に留まらず、例えば防災マニュアルに基づく勉強会を開催し職員間で読み合わせを行うなど、更なる入居者の安全性を考慮した訓練に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日進グループのモットーとして「笑顔とまごころ」をかかげているため、入居者の尊厳を尊重し対応している。	職員は入居者の生活史を理解し、入居者の持つ誇りを意識した声掛けや関わりに努めている。介助の場面では本人の意思や同意を必ず確認し、職員の思い込みで行動しないよう心掛けている。今回、法人内での研修で自分が相手の立場に立ったら、という内容で視点の在り方や自己の接遇の振り返りの機会を持った。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	事の始まりの際、本人にどうするのか確認。出来そうで出来ない事もあるため、初めのうちは職員と一緒に作業し、徐々に入居者主体で行ってもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれのペースがあるため、ある程度の集団での生活を望みますが、個々の尊厳を守るため、心身の状態など考慮し、その時にあった支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴や外出前には本人に衣類を選んで頂き、本人のその時に着たい洋服を選んでいただけるようにしている。職員は補助で助言。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の下ごしらえの準備を入居者に行ってもらっている。野菜の皮むきや刻むこと。配膳や下膳、茶碗拭きも入居者と一緒に行う。	ホームでは入居者一人ひとりの食事摂取量や嚥下状態に合わせた量及び形態での食事提供を行っている。入居者にはできる範囲で食事準備や後片付けなど食事に関する様々な場面に参加してもらっている。彩りよく盛り付けられた小鉢からは陶器を通して温かさを感じることができ、適温にすることで入居者の食欲意欲へと繋がるよう配慮している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	それぞれの嗜好があるため、その入居者が飲みやすい物を提供。1日の水分摂取量を1000CCを目標にしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	定期的に提携歯科に訪問診療して頂いていますが、毎食後は必ず口腔ケアを実施。ケアでの気づきは直ぐに歯科医へ報告。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェックシートを活用。それぞれの排泄パターンを把握に努めている。車椅子の入居者も極カトイレでの排泄をこころがけ対応。	職員は生活の中で入居者の残存機能を生かし、入居者それぞれの心身の状況に応じた介助の方法を検討しながらできるだけ排泄動作が維持できるように取り組んでいる。入居者によっては自力で後始末ができるよう排泄環境を整え、入居者の尊厳を大事にした関わりに努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	腸内環境を整えるため、水分量と運動に気をつかい水分量の把握と毎食前に廊下にて歩行訓練を実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	その日の体調や機嫌も考慮し声かけの工夫をしている。今は入りたくないというのであれば、しばらく時間をあけ再度声かけを行う。	職員は入居者の日課や意向を考慮し、時間帯や入浴方法などそれぞれに応じた入浴環境を準備している。入浴に消極的な入居者に対しては、本人が抵抗なく浴室に足を運べるよう声掛けを工夫し、その方が安心して清潔を保つことができるよう専門性を生かした関わりに努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はできる限り活動し、夜間よく眠れるようにしている。年齢や体調をみて、傾眠していたり入居者も居る。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服に関し、職員の判断で調整せず、必ず電話でも、かかりつけ医へ連絡をとり指示を仰ぐようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	以前、趣味としていた事、好きなことを見つけたり、さまざまな取り組みを実施して興味を示すものを普段の活用に取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今したいこと、これからしたいこと、行きたい所の意見を実現できるよう職員と家族一緒になり取り組んでいる。	ホームでは季節毎に入居者が親しみを持つ場所を検討し、入居者が外への関心を持ちながら外出ができるよう取り組んでいる。体力的な負担から外出に消極的な方もいるが、敷地内の事業所や庭先で外気に触れることで五感を楽しむことができている。入居者によっては自宅や墓参りなど個別に外出支援を行うこともあり、その方の思いや生き方を大事にした関わりに取り組んでいる。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居の際、ご家族との協議で少額の金銭管理の了承を得ている。外出の際は職員見守りにて、入居者個人で支払をいただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方に住まいの子供より連絡があった際は、取次ぎを行い、難聴の入居者へは、入居者に変わり職員が対応をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下やリビングでは季節感を判って頂ける様、季節に合わせた飾りつけをしている。また居室も個人の馴染みの品物を持ち込んでいただき安心感がもてる空間づくりをしている。	ホーム共用スペースは入居者の安全性や設備面の整備など、建設業を母体とする法人の強みを生かした明るい採光で気持ちの良い空間となっている。ホール中央にはゆっくりと過ごせるようソファが設置され、ひざ掛けを使用しながらテレビ鑑賞や談笑する入居者の姿が窺える。入居者がそれぞれの場所で安心できる空間が整えられている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	時折、テレビを消し、童謡・唱歌の曲を流し、お互いに昔を思い出し会話が弾むきっかけを作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅でも使用していた毛布や家具を持ち込んでいる。	居室には入居者がこれまで大事にしてきた家具や手回り品が持ち込まれ、職員は家族と相談しその方の動線に配慮しながら慣れ親しんだ生活様式が継続できるよう取り組んでいる。職員は入居者の心身の状態を維持しながらできるだけ自ら生活に関われるよう配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各入居者の身体機能の状態に合わせてベッドや家具の配置をし動線を確保、安全に配慮している。		